

牛群検定通信 No161

～ 夏バテの正体 ～

今年の夏は猛烈に暑く、9月に入っても猛暑日の新記録になるところが多くなるなど、北海道から九州まで長く暑い夏で乳牛にとっては過酷な年でした。しかしながら、暑さ寒さも彼岸までという諺にあるとおり、最近は少し過ごしやすくなってきて、牛の採食量も夏の一時期に比べ少し回復してきたように思います。

ところが、採食量も回復し、乳量も少し戻ってきたと安心していただけ、9月、10月頃にいわゆる乳牛の夏バテが起これ、飼養管理が適正でない場合、乳房炎牛が多くなったり、ひどい場合には牛がバタバタと倒れる、ということが起きてきます。

近年のように毎年猛暑が続くようになると、暑熱の影響で仕方がないことだと諦めてはいないでしょうか。何事もそうですが、原因のない結果などありません。この時期に牛が調子を崩し、最悪の場合淘汰しなければならなくなる、という結果にも原因はあります。原因をしっかりと理解し、対策を講じれば、いわゆる夏バテは防ぐことができますので、頑張りましょう。

夏バテの正体はカルシウム不足です。毎回同じような事を言っていますが、乳牛にとってカルシウムの関与は非常に重要ですので、しっかり理解してください。

9月中旬以降涼しくなると、飼料摂取量も回復し、乳量も増加し始めている農場も多くみられます。しかしながら、乳量が回復したからと言って安心してはいられません。乳量が増えるということは牛乳中に出ていくカルシウムが増えるということで、牛の体からカルシウムが減っていくということを意味しています。また、夏の暑熱の影響で夏場はカルシウムの吸収率が低下していたため、体内の貯蔵カルシウムが大幅に少なくなっています。これらのことから、搾乳牛では秋になって乳量が増加する時期になるとカルシウム不足を起こし、起立不能、第四胃変位、食滞、乳房炎などが多くなってきます。ですから、気温が低下し乳量が回復してきたときには、カルシウムの給与についてよく考えなければなりません。

TMR 給与を行っておられる方は TMR のカルシウムを増やせばよいのですが、分離給与を行っておられる方は、給与方法が重要になります。カルシウムの吸収は腸の中のごく短い範囲でしか行われませんので、一度に多量のカルシウムを与えても吸収されず、そのまま糞の中に出てしまいます。ですから、少量ずつ回数を多く与えないとカルシウムの吸収量は増加しません。手間は掛かりますが乳牛の事故防止や生産性向上に欠かせませんので、是非実行してください。また、前回も書きましたが、カルシウムが不足すると乳房炎も増えてきますので注意が必要です。

更に、秋になってくると分娩時の事故も増加します。これも夏場の暑熱の影響でカルシウム不足となり、難産や、逆子、胎盤停滞、分娩後の起立不能、食滞など、分娩時の事故の可能性が非常に高くなりますので、この時期は移行期のカルシウム管理に十分お気を付けください

(渡邊)